

山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

まつのきこふん
松の木古墳遺跡

いけしたじょうあと
池下城跡遺跡

序

教育長 西 秋 良 策

北に伊吹 南に霊仙、岐阜県境に連なる両山系の狭間に位置する本町は、はるか縄文の頃から 東西交通の要衝として人々の定住をみ、その証しが数多く伝えられてきています。

昭和58年から3か年にわたって 県の文化財保護協会に委託して実施した「山東町内遺跡詳細分布調査」の結果では、新たに50余か所もの遺跡が確認され、それまでから周知されていたものと合わせますと、町内には実に150か所もの遺跡が分布していることがわかりました。本町の面積は、約6割を占める山地を加えても僅か53平方軒余ですから、1平方軒あたり3か所もの遺跡を保有していることになります。遺跡は点でなく面でとらえられますから、本町域はすべて遺跡と言っても過言ではない状態です。

したがって、土地開発や道路工事、昭和50年頃から始められたほ場整備事業等にかかわっては、事前に発掘調査を行うことが通例とまできています。

今回の「松の木古墳」と「池下城跡」発掘調査も、県営ほ場整備に伴い県教委の委託をうけて実施したものです。

調査結果の詳細は本報告書掲載のとおり ともに“古墳”“城跡”と断定できる確証はえられませんでした。これは 短期間のしかも破壊のおそれがある部分に限っての調査であったためと考えられます。しかし 両遺跡ともに 明らかに人々の手によって構築されたことを示す遺構があり 今後の調査に大きな期待を持たせるものでした。

さらに 本報告書は“松の木古墳”にかかわる“志賀谷の七つ塚”に言及しています。“引塚”以外は未調査のまま 既に消滅していると考えられるものもありますが、大字志賀谷という狭い地域に 七つもの塚が数百年いや千数百年を経たと考えられる今日まで伝承されてきていることに驚きを覚えます。そして その所以を知りたいとの衝動を禁じえません。

いつの日か、わたしたちの先人の地下からの叫びや囁きを余すことなく聞きとることができることを願います。その日まで、これらの遺跡を ふるさとの自然と共に大事に守り通したいものです。

例 言

1、本報告は、山東町における平成2年度県営ほ場整備事業に伴う関連遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果である。

2、本調査は、滋賀県教育委員会からの委託を受け、山東町教育委員会社会教育課が実施した。

3、本書には、坂田郡山東町松の木古墳遺跡・池下城跡遺跡の2遺跡を収載した。

4、調査の体制は下記の通りである。

調査主体	山東町教育委員会	教育長	西秋 良策
調査事務局	山東町教育委員会社会教育課	課長	本庄 康男
	〃	係長	野一色義明
	〃	主事	丸本 光雄
	〃	〃	山田 悦麻
	〃	〃	大橋 昭彦
調査担当	〃	〃	桂田 峰男
調査作業員	鹿取恵正、筑摩弘、井関常吉、井関正義、森田彦三、富岡春己 岩崎寛治、岩崎貞之助、馬淵ため尾、川畑ふじゑ、		
整理補助員	谷口千夏		

5、出土遺物写真については、寿福滋氏を煩わした。記して謝意を表したい。

6、本書をまとめるにあたって、下記の方から助言、協力を得た。記して厚く感謝の意を表したい。

兼康保明 母利美和 谷口徹 鹿取恵正 森本浩英 福願寺

7、付論に関しては、中井均氏（米原町教育委員会）より、玉稿を賜わった。

8、本書の編集は桂田峰男がおこなった。

目 次

序

例 言

1、坂田郡山東町松の木古墳遺跡

I、調査の経過 2

II、調査の結果 5

III、おわりに 6

志賀谷の七つ塚 6

2、坂田郡山東町池下城跡遺跡

I、調査の経過 13

II、調査の結果 14

III、おわりに 17

付 論 池下城跡について 一特にその所在地の考察— 18

挿 図 目 次

図 1、調査地周辺図

1、松の木古墳遺跡

図 2、地形図	1
図 3、トレンチ設定図及び礫群検出状況図	3
図 4、断面図	4
図 5、志賀谷の七つ塚位置図	10

2、池下城跡遺跡

図 6、地形図	12
図 7、遺構及びトレンチ設定図	15
図 8、断面図	16

挿 図 写 真 目 次

写真 1、馬塚	7
写真 2、福願寺に伝わる馬の櫓	7
写真 3、南天塚	8
写真 4、石塚（神ノ前）	9
写真 5、石塚（名引）	9
写真 6、引塚	9
写真 7、柳原塚	9
写真 8、森塚	10

古文書

馬塚に伝わる古文書	8
南天塚に伝わる古文書	8

図 版 目 次

松の木古墳遺跡

- 図 版 一、(上) 調査前風景
(下) 作業風景
- 図 版 二、(上) 松の木古墳全景
(下) 草類除去後
- 図 版 三、(上) トレンチ内礫検出状況
(下) 作業風景
- 図 版 四、(上) 礫群検出状況
(下) 出土遺物

池下城跡遺跡

- 図 版 五、(上) 調査前風景
(下) 作業風景
- 図 版 六、(上) T-1 トレンチ草類除去後
(下) T-1 トレンチ表土除去後
- 図 版 七、(上) T-2 トレンチ
(下) 作業風景
- 図 版 八、(上) T-3 トレンチ
(下) T-4 トレンチ
- 図 版 九、(上) T-5 トレンチ
(下) T-5 トレンチ断面



- | | | |
|------------|----------|-----------|
| 1. 松の木古墳 | 2. 池下城跡 | 3. 上向川遺跡 |
| 4. 弾正塚古墳 | 5. 出口遺跡 | 6. 塚本古墳 |
| 7. 東良遺跡 | 8. 西代遺跡 | 9. 時重遺跡 |
| 10. 北方田中遺跡 | 11. 笹原遺跡 | 12. 瓢箪山古墳 |
| 13. 通照寺遺跡 | 14. 引塚遺跡 | |

図1 調査地周辺図

1. 坂田郡山東町松の木古墳遺跡

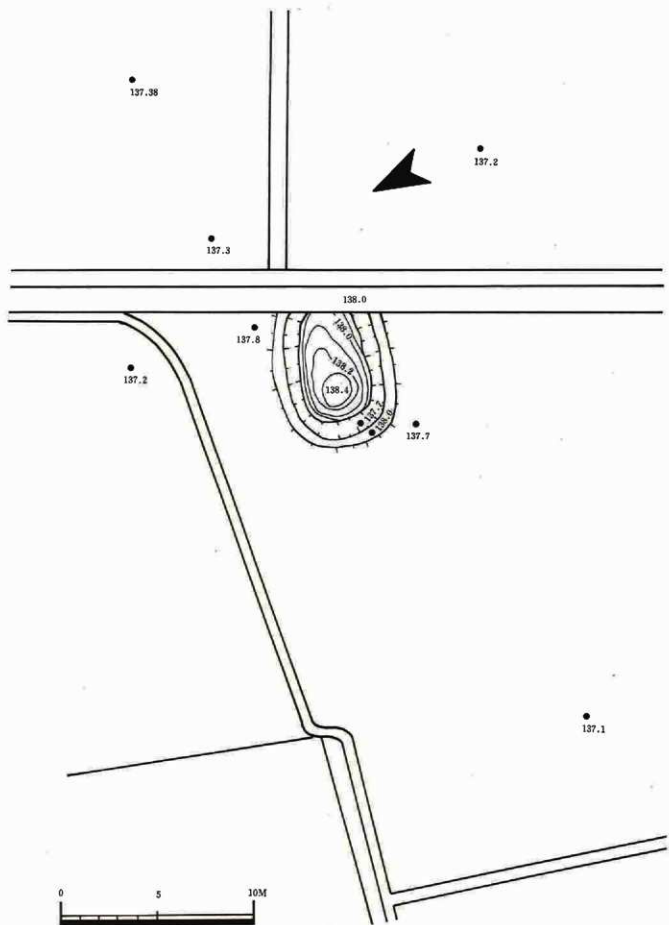


図2 松の木古墳地形図

I. 調 査 の 経 過

位置と環境

山東町は、北に伊吹山、西に横山丘陵、南・東は霊仙・鈴鹿山系と四方を山々に囲まれた地形を有する。この地形に、天野川・黒田川が流れ、また、多数の低小丘が点在するなど複雑多岐の様相を呈している。

今回調査対象となった松の木古墳遺跡は、調査地の北を西流する姉川と、西に南流する黒田川によって形成された肥沃な平野部に位置する大字志賀谷の北西地先に所在する。

松の木古墳は、通称「志賀谷の七つ塚」の一つとされており、『改訂近江國坂田郡志』によると、

「東黒田村大字志賀谷の郷内七箇所に塚散在せり、即ち、小字上貝戸に「馬塚」あり。小字中切に「南天塚」あり、塚上多数の南天樹あるを以て其の名を得たり。小字引の田畠に一塚あり。其の名傳はらず。小字八幡に松の木塚あり、是も南天塚と同じく、塚上松樹あるを以て其の名あり。小字森に一塚あり、俗に森塚といふ、地名を塚に名附しならん。小字神代に石塚あり。以上を志賀谷の七塚と稱す。但、口碑・傳説湮滅して知る由なし。」とある。これに柳原塚を加えて、七つ塚とされている。

この七つ塚の内、引塚については昭和62年度に県営ほ場整備事業に伴い、山東町教育委員会が調査を実施したが、塚の性格を明確にすることはできなかった。

調査の経過

調査は、現存するマウンド自体とマウンド周辺に計画されている排水路及び切土部分の2方向から実施した。

まず、排水路部分と切土部分に3m×3m程度のグリッドを設定した。また、マウンド周辺には3m×10mのトレンチを設定し、遺構面もしくは遺物包含層まで0.4m²のバックホーを用いて掘削することとした。

しかし、いずれのグリッド・トレンチからも遺構・遺物は検出されなかった。

続いて、現存するマウンドに十文字のトレンチを設定し掘ったところ、地表下0.3mでトレンチ全域に敷きつめられた礫群を検出した。

そこで、調査の主眼を松の木古墳自体に移し調査を続行した。

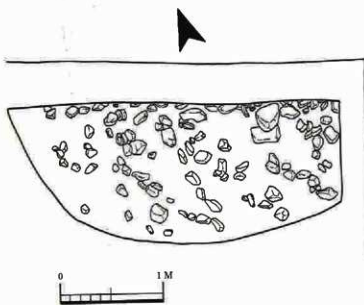
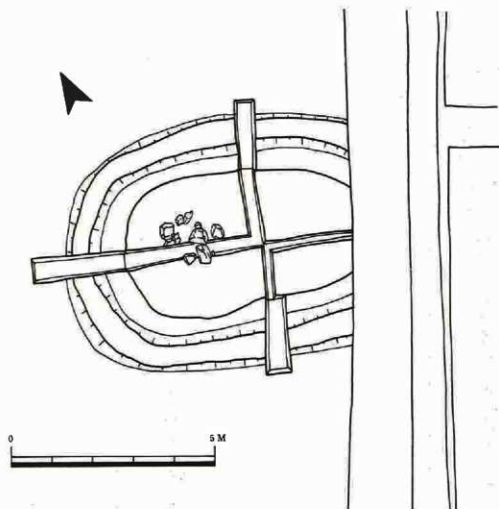


図3 トレンチ設定図及び磁群検出状況図



- 粘土
- ⊙ 粘质粉土
- ⊖ 粉质粘土
- ⊕ 粉土
- ⊗ 粉砂
- ⊘ 砂
- ⊙ 砂质粉土
- ⊖ 粉质砂
- ⊕ 砂
- ⊗ 砂质粉土
- ⊘ 粉质砂



图 4 断面图

II. 調査の結果

松の木古墳は、大字志賀谷の北西部地先に位置しており、墳頂部にあたる所は標高約138.4mを測る。現在周囲は水田として開かれている。

外部形態

古墳の東側は南北に走る農道により一部破壊されているので、その全容は知り得ないが、現存する規模は周溝内側下端（墳丘部分のみ）で計測すると、長軸約5.5m、短軸3.2m、高さ約1mの楕円形を呈している。そして外周する溝及び土壘（盛土）を含めた規模は、長軸約7.1m、短軸約6.1mを測る。

墳頂部には、0.2～0.4m程の10数個の割石がのっている。また墳丘を取り囲むように周溝と土壘（盛土）が巡らされている。東側が農道により破壊を受けているが、他の三方の溝の在り方からみてほぼ全周するものと思われ、周囲の水田と一線を画するものである。周溝は、底面幅約0.4～0.6mを測り、土壘（盛土）は盛土下端で幅約1mを測る。

内部構造

次に内部構造であるが、図3、図4に示す通りである。墳丘部分は2層に分けられ、上層が表土で、淡茶色粘質土。厚さは約0.4mを測り、墳丘上に植生している楓、百日紅の根が派生しており、比較的硬質の積土である。下層は黒墨色粘質土である。厚さ0.4～0.6mを測り、ほぼ水平に盛られている。土壘も2層に分かれ、上層が淡褐色粘質土で、周溝に沿って盛土がなされている。断面は台形状を呈し、厚さ0.2～0.4mを測る。下層は耕土で暗褐色粘質土である。一方周溝は単層で暗茶褐色粘土である。深さが0.2～0.3を測り、断面は「U」字形を呈している。墳丘及び土壘から流れ込んだ堆積土であろう。土壘及び周溝は東側の破壊された部分を除き、墳丘に沿ってめぐっている。

礫群は、調査の経過で述べたように、地表下約0.3mで検出された。礫は0.1～0.3mの大きさで、0.1～0.2mの厚さを呈している。分布の状況は、墳丘中央部ほど密で裾部に向かうほど粗く乱れた様相を呈している。断面でみると第2層上面に礫群が敷かれている状態となっている。

そこでこれら礫群の下層において埋葬施設の有無を確認するために、墳丘の一部（墳丘北西側の1/4）を更に掘り下げることにした。しかし、結果的に埋葬施設を確認することはできなかった。

遺物

遺物は、墳丘部分の第2層より須恵器数片と寛永通宝2枚が出土した。出土状況よりみ

て、この遺物は墳丘の築造に直接関係するものではなく、盛り土を盛る際に混入したものであろう。

Ⅲ. お わ り に

今回調査した松の木古墳は、従来より古墳として周知されていたが、調査の結果、いわゆる主体部としての埋葬施設を有する遺構はなく、また、関連する出土遺物もないなど、古墳と断定し得るものは確認できなかった。

しかし、表土下より0.1~0.3mの大きさを有する礫群（積石）が検出され、また、その昔墳丘上に小祠があり、残存している割石はその台石であるという伝承などから、「塚」としての性格を有するものではないかと考える。

最近になって、は場整備等で「塚」が発掘調査の対象として取り上げられることが多くなってきた。県内で主な遺跡をあげると、京田塚・大將軍塚遺跡^①、岸脇遺跡^②、新池東地区遺跡群^③、神ノ木塚遺跡^④、下開田遺跡^⑤、柏木北山塚などがある。調査の結果は、性格不明として扱われているものが多い。

本遺跡も、今回の調査で古墳と断定できるものではなく、また表土下で検出された礫群も墳丘中央部に偏りをみせ、礫群の下層に遺構もないことから、広島県などで報告されている積石塚^⑦としての可能性も低いと思われる。どちらかといえば、盛土上に小祠を有していたことに塚の性格を求めるべきであろうか。

古くから、志賀神社（志賀谷）の前身である八幡神社がこの地にあったと伝えられていることから、八幡神社の小祠の可能性が考えられる。八幡神社が今の志賀神社の地に移されるに及び、小祠も移され、台座石のみ残ることになったのであろうか。しかし、台座石にしては形が不整形であるし、小祠を裏づける遺構及び遺物も検出することはできなかった。また礫群の意味するものも判然としない。この説にも多くの問題点が残る。

今後の課題としていきたい。

志賀谷の七つ塚

今回調査した松の木古墳（塚）は、志賀谷の七つ塚の一つとされていることから、ここで七つ塚について紹介することとしよう。志賀谷の七つ塚は、志賀谷区を取り囲むように七つの塚が存在していた。このことは、「Ⅰ、調査の経過」の位置と環境で述べたように、

『改訂近江國坂田郡志』にその記載を見ることができる。しかし、そこには馬塚、南天塚、(名)引塚、松の木塚、森塚、石塚の六塚しか記載されていない。地元では、これに柳原塚を加えて七つ塚と称している。柳原塚ではなく経塚という説もあり、どれをもって七つ塚とするかは諸説があるが、ここでは地元の説をとって、柳原塚を加えて志賀谷七つ塚として、以下に紹介することとする。

馬塚 馬塚は、志賀谷から堂谷へ抜ける農道の東側に所在する。

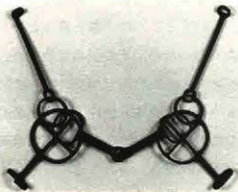
塚の形は円柱形を呈しており、塚上に松の木が樹生している。馬塚には、壬申の乱において大海人皇子(天武天皇)の愛馬が当地で死んだ、その馬の墓であるという伝承が残っている。また、大海人皇子ではなく欽明天皇であるという説もある。この馬塚に関する馬の轡と古文書が福願寺(志賀谷)に残されている。



写真1. 馬 塚

馬の轡を形態的に見てみると、馬の行動を制御する機能を持った鉄製鍛造の轡である。轡は馬の口の中に入れてかます銜(はみ)、銜の先に取付けられて手綱を連結するための引手(ひつて)、銜の両端に耳付けられて銜の脱落を防ぎ、且、面繫(おもがい)に連結する鏡板(かがみいた)の三部材によって構成されている。

銜は、中央に小さな御金(くくみがね)を組合わせた断面長方形のもので、両端にD字形の大きな銜先環が付く。全長24.9cmを計る。この銜は、径0.5cmの遊環をへて引手につながる。引手は棒状の一本引出で、両端に小さな環を伴う。引手の手綱の環つまり引手壺は、引手の軸線とは90度余の角度をなす。引手の全長は16.1cm。鏡板は径8.0cm余の円形内を四分割する十文字形の棒状飾りが付いたものである。銜先環はこの棒状飾りの一本と接続している。鏡板の一端は面繫につなぐための立聞(たちぎき)が付く。立聞は鏡板の軸線と約90度の角度をなし、楕円形に抱き合せている。



この轡を納めた桐箱の蓋表には、「寺賣 天

写真2. 福願寺に伝わる馬の轡

武天皇御縁 古轡 志賀江山福願寺」の墨書がある。この種の十文字形鏡板をそなえた轡は、「貞丈雜記」に「古代より有りし物なり」と記されるように、古墳時代以来の形態を保つ簡素な造りの轡である。ただ、本例が「天武天皇御縁」の時代にまでさかのぼり得るかどうかについては、その保存状態等から判断してもいささか疑問の残るところであろう。

一方、古文書の年代については天文三年(1532年)と文中に明記されており、室町時代後期にあたる。要約すると、長岡加賀守(長岡郷を治めていた土豪)の娘が黒田伊予守(黒田郷を治めていた土豪)に嫁ぎ、その後伊予守が願をかけ、その願がかなった礼に馬を一匹贈ったところ、天文三年、その馬が福願寺の庭前にて死んだ。近くに埋葬されたが、その地の領主が哀れんで馬具を福願寺に寄進し、馬の供養も行なった。また毎年7月7日~14日まで子供大念仏も唱えたとある。今も福願寺では毎年馬供養を行っている。

南天塚 南天塚は、農道を挟んで馬塚の西側の畦上に所在していた。字のごとく、わずかな盛土のうえに南天の木が樹生していた。この南天塚も馬塚同様、由来を印した古文書が残されている。

古文書を要約すると、「今あなたの土地である中切というところは、昔、森本とって南天の森であったが、不心得なる地主が、他の木を植えたところ、南天が枯れてしまい、その家も絶え、その地も他の人の物となり、今はあなたの土地となった。その地に南天を植え、家名も森本と名のりなさい。そうすればあなたの家も栄える」とある。年代は寛政四年(1792年)8月15日と明記されている。

堂神結所之事

抑長岡加賀守殿御姫を黒田伊豫守殿江被遣 豫州殿知行所及日授数年願之處 相方湯令成就卒御馬老正御付被遣 此者天文二歳午年 此馬者御馬二而即當村二而死ス 字浄界戸遣より拾間計東埋 領主深哀馬具を福願時二寄進ス 為此馬之 其年七月十五日 毎年 寺二御経讀誦亦七月七日 より十四日迄子共大念佛初来卒

馬塚に伝わる古文書(釋文)



写真3. 南天塚

其方二つある事あり 其元の田畑中切と申口
森本と申て稱かたちあり 是ハむかし森口
申て、堂名のたまりなり 此處ハ八尺四方の口
なれてんの森なる甲に むかしころへ
なつての森なる事あり 此の森の水をた
ちてハじぬりたへ 其後二其家もたへ
田畑も外の人の田畑となり 今ハ其の
田畑となりて 今ハこころへかいて 森かた
こほち 是ハこころへなる事に候 む口口
ありきたる事をへし候間 其てん口口
裏のふきつとなる事あり 是に口口
田の角に稱かたちをつき 水々た口口
ように 其元の地名をあらたの 森本
なり候 其家はんじやうの本となる
寛政四年八月十五日之夜口

南天塚に伝わる古文書(釋文)

石塚 現在石塚と称されているものに、志賀谷集落の東、小字神ノ前に所在する塚と、集落の南西、小字名引に所在する塚の2つがある。『改訂近江國坂田郡志』には、「小字神代に石塚あり」とあるが、現在その地名は残っていない。ただ、集落北側に上代という小字があるが、石塚と覚しき塚は確認できない。



写真4. 石 塚 (神ノ前)

小字神ノ前の石塚については、伝承は残っていないが現在でも崇拝されている。小字名引の石塚の石は“たたり石”と呼ばれている。昔、赤ん坊の襁をその石のうえに干したところ、たちまちその人に腹痛がおこったといわれ、また、もともと赤、黒、白の三つの石があったが、赤と黒はどこかに移動して、いまは白の石のみ残っているとも言われている。



写真5. 石 塚 (名 引)

引塚 引塚は、勤労青少年ホーム南の小字名引の水田中にあった。昭和62年度の県営ほ場整備事業に先立ち、調査を実施した。現存していた塚の規模は、直径約0.6m、高さ0.2mと小規模なもので、ほぼ円形を呈していた。地表部分を斯割り、除去したところ、最大径約0.4mを測る楕円形状に磯畔が検出された。この楕円形に配された礫は人為的な要素は残しているものの、出土遺物もなく、また伝承も残っていないことから、塚の性格を確定するには至らなかった。



写真6. 引 塚

柳原塚 柳原塚は、志賀谷集落の南東、小字柳原の水田中にあった。平成元年度の県営ほ場整備事業に先立ち、調査を実施したが、遺構、遺物もなく、また伝承も残っていないことから、塚の性格など不詳といわざるを得ない。



写真7. 柳 原 塚

森塚 森塚は、勤労青少年ホームの西、小字名引の畑地に所在していた。『改訂近江國坂田郡志』には、「小字森に一塚あり、俗に森塚といふ」とあるが、森という小字は志賀谷には見当たらない。現在、森塚として伝わっている地のそばに一本杉があったと言われているが、伝承もなく性格不詳である。



写真8. 森塚

以上、簡単に七つ塚について述べたわけであるが、このような塚の中には、発掘調査の段階で葬り去られた例も少なくない。近年、諸氏によって塚研究が進められ、徐々にではあるが、「塚」が解明されつつある。

今後、発掘調査及び分布調査等で「塚」を確実に把握していく一方で、文献資料や伝承等、周辺諸学の研究の援用が必要と思われる。



1. 松の木古墳 2. 馬塚 3. 南天塚 4. 石塚 5. 引塚 6. 柳原塚 7. 森塚

図5. 志賀谷の七つ塚位置図

註

- ①田中勝弘「高月町京田塚・大科軍塚遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ』滋賀県教育委員会・朝
滋賀県文化財保護協会 1978
- ②兼康保明ほか「高島郡今津町岸脇遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-1』滋賀県教育委員会・
朝滋賀県文化財保護協会 1980
- ③松浦俊和「新池東地区遺跡群」『日本住宅公団仰木地区土地区画整備事業対象地内埋蔵文化財包蔵地発掘
調査報告書』大津市教育委員会 1980
- ④田中勝弘「坂田郡伊吹町神ノ木塚遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅵ-2』1980
- ⑤横田洋三「マキノ町下開田遺跡発掘調査報告書」滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1985
- ⑥兼康保明・米田実「柏木北山塚」『住宅・都市整備公団水口地区土地区画整備事業に伴う発掘調査報告書』
水口町教育委員会 1985
- ⑦小都隆・中田昭「山田積石塚発掘調査報告」甲田町文化財保護委員会 1972
小都隆『広島県佐伯郡廿日市町阿品積石塚発掘調査概報』広島県教育委員会、広島県文化財協会 1975
小都隆・木村妙子『広島県高田郡吉田町森山積石塚発掘調査概報』広島県教育委員会、広島県文化財協
会 1975
- ⑧拙稿「引塚遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』山束町埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 1987
- ⑨垣内光次郎「女郎塚遺跡発掘調査報告」『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』石川県立埋蔵文化財
センター 1982
- ⑩大場繁雄「神道」『新版考古学講座』第8巻 雄山閣出版 1971
- ⑪斉藤吉弘「日光山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県教育委員会 1981

2. 坂田郡山東町池下城跡遺跡

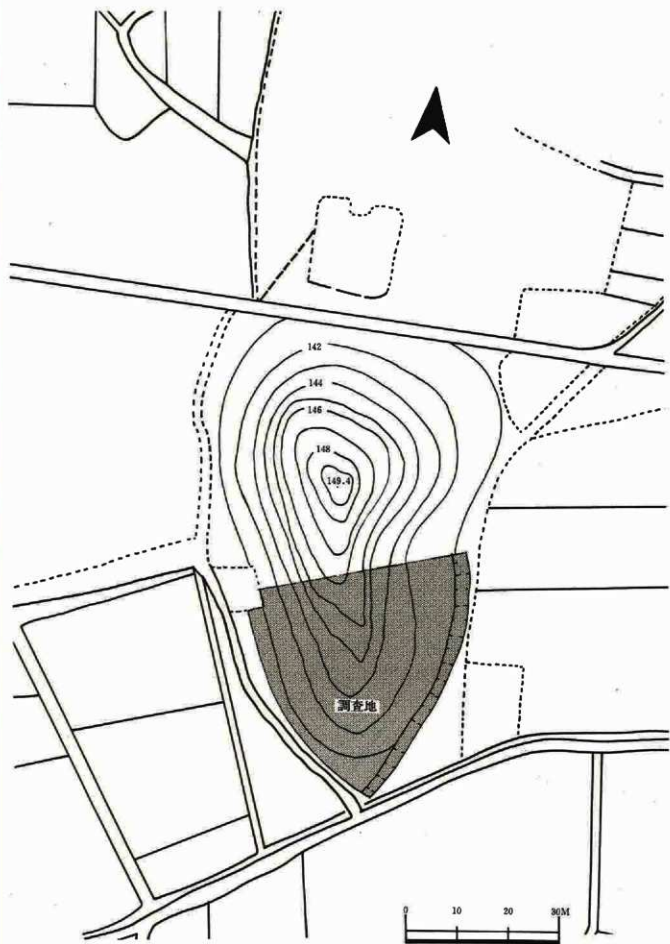


图6 池下城跡地形图

I. 調査の経過

調査に至る経過

池下城跡遺跡は、山東町の中央部からやや北西に位置する大字志賀谷、大字池下に所在する。平成元年、県営ほ場整備事業（山西部地区 志賀谷工区）の計画にあたり、滋賀県農林部（長浜県事務所土地改良課）より、埋蔵文化財の有無について協議があった。そこで、町教育委員会が事業計画を調べたところ、池下城跡が含まれていたため、事前に発掘調査を実施する必要が生じた。

調査は滋賀県教育委員会の依頼により山東町教育委員会が実施することとなった。現地での調査は、平成2年6月20日より8月9日までで、以後引き続き出土遺物の整理、報告書作製業務をおこなった。

位置と環境

山東町は、琵琶湖の北東部に位置している。山東町の北側に近江最高峰伊吹山を望み、東側から南側にかけて霊仙山、鈴鹿山脈の山々が連なる。また、西側は横山丘陵が位置しているなど、町の四方を山々に囲まれて、関ヶ原地袂部と呼ばれる盆地上に成立している。山東町の北側には姉川が、また南側は天野川が西流しており、特に姉川は湖北の肥沃な沖積平野を形成しているが、町内に点在する多数の小丘陵により、狭い可耕面積の中ではその恩恵もあまり多いとは言えない。

一方、今回の調査地の周囲の遺跡をみると、縄文時代、弥生時代の遺跡はほとんどみられない。しかし、古墳時代に入ると、西側の横山丘陵において、横山古墳群、犬飼古墳群などの古墳がやや散発的に造られるようになる。

歴史時代になるとその数も次第に増加し、郷長クラスの遺跡とされる北方田中遺跡や、上向川遺跡などの遺跡が所在する。また、調査地周辺だけでなく町全体として、横山城跡、大原氏館跡、池下城跡、野瀬山城跡（長比岩跡）、八講師城跡、猪鼻城跡などの中世城館の遺跡が多く見られることである。これらは、山東町が交通の要衝として重要な位置を占めていたという所以であると考えられる。

調査の経過

今回の調査は、池下城跡と推定される舌状丘陵南端部及び周辺の計画されている排水路・切土部分について調査を実施した。まず、排水路及び切土部分については3m×3m程度のグリッドを設定し、バックホーを用いて遺構ならびに遺物包含層の有無を確認するため掘削した。しかし、いずれのグリッドからも遺構、遺物は確認できなかった。

そこで、調査の主眼を池下城跡とされる舌状丘陵南端部に移し、調査を続行した。

II. 調査の結果

池下城跡と推定される舌状丘陵は、池下区の南西に位置し、今回の調査地は、標高約150mを測る最頂部より南になだらかに広がる舌状丘陵の南端にあたる。

調査方法は、雑木等を伐採・除去後、地形測量を実施し、その後図6のとおり5ヶ所のトレンチを設定した。

T-1 T-2に直交し、西側の土塁上・カラ掘状遺構の確認をするために設けたトレンチである。調査地最頂部から西側のカラ掘状遺構に至るなだらかな斜面においては、表土直下で明黄褐色の地山が確認された。カラ掘状遺構は皿状の断面形状を呈し、黒褐色粘質土（礫混）の単層であった。また、その西側に展開する土塁状遺構については、第1層が表土、第2層は黒墨色粘質土、第3層は暗黄褐色粘質土からなり、各層が水平堆積している。これらの断面形状からみて、人為的に堀状に掘られているが、城（砦）の機能としての堀とは言い難く、土塁状遺構も自然堆積ではないかと考えられる。遺物は、カラ掘状遺構東側で、近代の陶器片が数点検出されたのみであった。

T-2 調査地の南北に設定したトレンチで、表土約0.1を除去すると、明黄褐色の地山となる。トレンチ南端は、近年のゴミの投棄により攪乱をうけている。

T-3 T-1の東側に設定したトレンチで、断面形状は東にするどく落ち込む。トレンチの東端のみ表土と黄褐色粘質土（礫混）の二層となるが、他は表土直下で地山となる。

T-4 T-2に直交し、T-3の南に設定したトレンチで、表土約0.1~0.3mを除去すると地山が確認された。

T-5 T-2に直交し、T-1の南に設定したトレンチである。トレンチ西側の土塁状遺構は、T-1同様三層からなる自然堆積ではないかと考えられる。

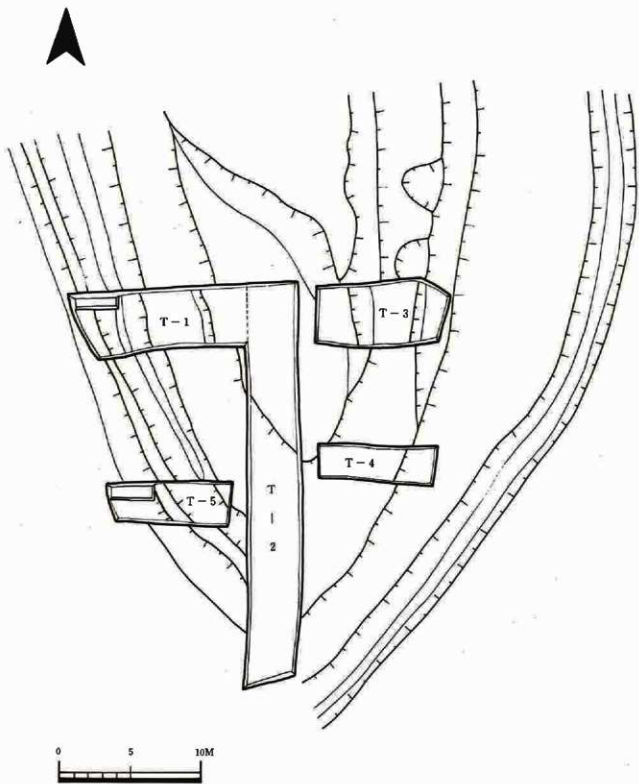


図7 遺構及びトレンチ設定図

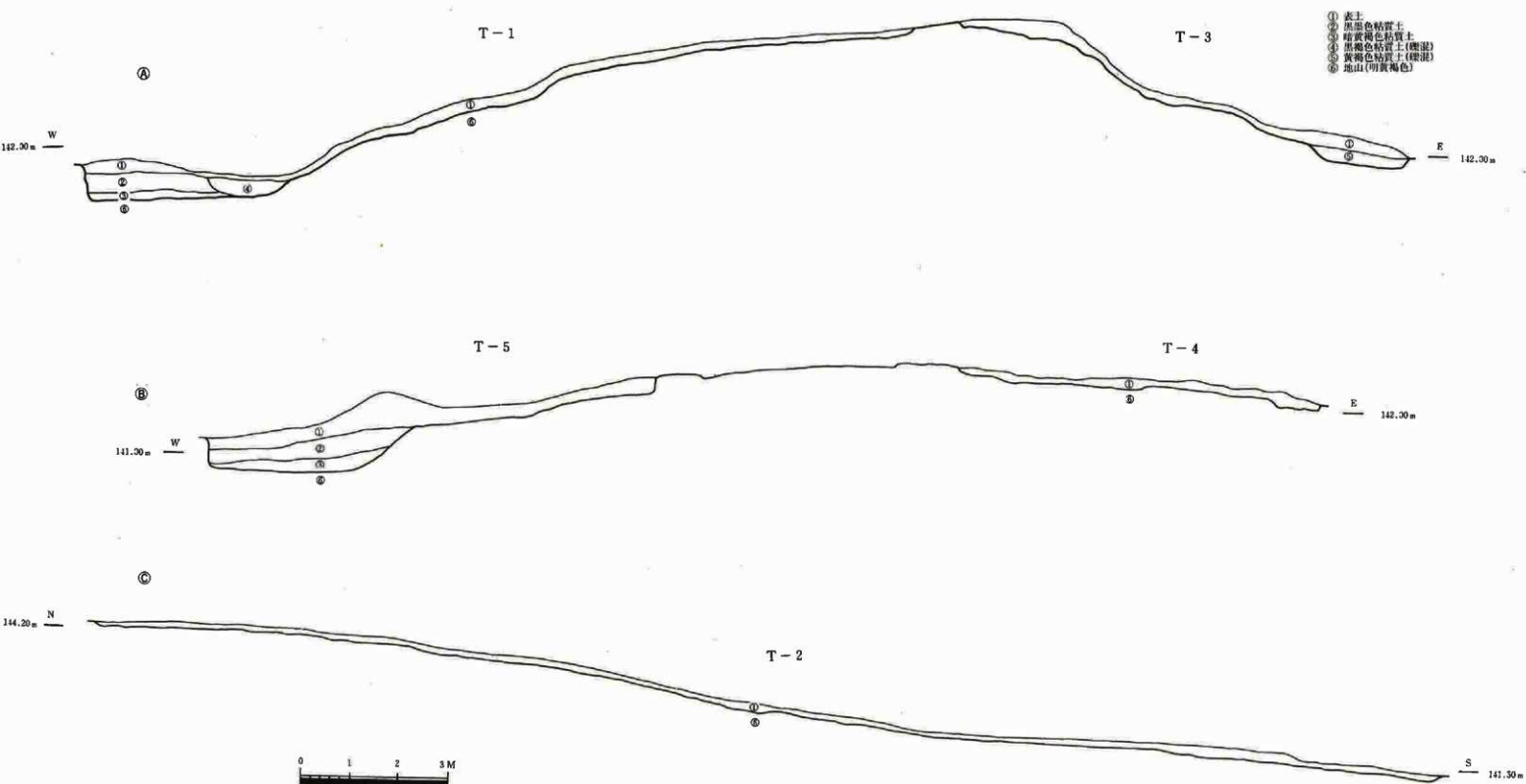


图8 断面图

Ⅲ. お わ り に

以上、5ヶ所にわたるトレンチ調査の結果、表土が非常に薄く、表土直下で検出された地山も、全体的になだらかな感を呈し、カラ堀状・土塁状遺構についても、掻き上げ、版築などの痕跡を確認し得なかった。また、遺物についても近代の陶器のみであった。こうした調査の結果から、当該地点においては、当初予測していた池下城に関連する遺構の検出や、遺物の出土はなかった。

ただ、今回の調査地が池下城跡と推定される舌状丘陵の南端部分であり、主郭と考えられている遺構などは調査されていないことなど、今回の調査結果を消極的なものとせず、むしろ積極的な意味において捉えたいと考えるものである。

池下城跡について

一特にその所在地の考察一

米原町教育委員会 中 井 均

山東町大字池下に所在する池下城跡に比定される丘陵の一部を、今般山東町教育委員会がほ場整備事業に伴い発掘調査を実施された。調査結果については本報告書に詳しいが、一言でいえば、今回の発掘調査からは当該地が中世城跡であったとは言いがたいようである。

さて池下城跡については、『改訂坂田郡志』に、

「池下城

大原村大字池下村にあり。貞応年中佐々木左衛門大夫判官重綱此地に築く、後長禅寺となる。」

とあり、貞応年間(1222～24)に佐々木大原氏の始祖重綱が築城したことを記している。この『改訂坂田郡志』の原資料となったのは、享保十九年(1734)に編された『近江輿地志略』であろうと考えられ、同書中に、

「長禅寺

(前略)貞応年中佐々木左衛門大夫判官重綱始めて此地に城を築き、城地安全の為に此寺を関基する所也(後略)。」

とあり、この江戸時代の地誌が初見である。池下城に関する記録はこの『近江輿地志略』のみであるが、池下については、宝暦三年(1753)に写本された『江州佐々木南北諸士帳』に

「池ノ下 住佐々木大原末 池下治部左衛門

” 伊吹山刈安合戦討死 同男右近太郎」

と記されており、池下に池下氏が在地領主として居住していたことがわかる。『改訂坂田郡志』ではこの池下氏を大原氏の支流としているが、これは『江州佐々木南北諸士帳』を原本とした結果と考えられる。同時代史料としては、『大原観音寺文書』第244号「寺領注文断簡」[永享十年(1438)六月廿五日付]に

「一反六坊前無天役分米一石五斗此内一斗減ス池ノ下二郎右近」

とあり、池下氏の存在は確実である。しかし他の大原氏支流諸氏の出自は明確であるのに対し池下氏については大原氏の一族であったか否かは明確な史料を欠いている。鎌倉時代初頭の大原重綱築城はともかくとして、室町時代には池下に池下氏が居住していたようで

ある。池下城はおそらくこの池下氏の居城として機能していたのであろう。

ではこの池下城はどこに位置していたのであろうか。今回調査が実施された地点が池下城跡に比定されたのは滋賀県教育委員会が編集した『滋賀県中世城郭分布調査6（旧坂田郡の城）』（1989）が初見であろう。⁸⁴この報告書で池下城跡は小字堂山（標高162.7m）から南に派生する小丘陵上に求めている。その規模は南北200m、東西60mを測る。この比定地を詳細に観察してみると、まず堀切bであるが、これは道路によって切断されたものと推察される。この堀切bより北部については、曲輪となるべき平坦地の中央に土壘状の高まりがあり、通常の中世城郭の曲輪と様相を異にしている。これは城郭に伴うものではなく、境界としての土壘と考えたほうが妥当である。さらに堀切bより南側については過去に土探りがおこなわれており中世以降の旧状は保たれていない。特に丘陵をめぐる空堀状の窪地はすべて土探りの痕跡であることが判明している。⁸⁵つまり報告書に掲載されている城跡の概念図は直接中世城郭の遺構を示していないようである。さらに小字堂山が小さな独立丘陵であるにもかかわらず、その頂部に城郭遺構が存在しない点、疑問が残る。また小字堂山という地名からしても城郭の存在よりも寺院跡の可能性が高いと考えられる。では池下城跡はどこに所在していたのであろうか。明治六年（1873）に作成された大字池下村大絵図を見ると今回の調査地東側に水路で囲まれた方形区画が存在する。さらに付近の小字を見ると「東良屋敷」「下庄司」「西屋敷」「中庄司」といった居館関連地名が散見できる。このような状況から池下城跡は平地に築かれた居館の可能性が考えられる。また大原氏をはじめその支流と伝えられる春照氏、烏脇氏、野一色氏、白井氏、夫馬氏、本郷氏、竹腰氏等、『大原観音寺文書』で確実にその存在の明らかな一党の城館跡を見ると、いずれも詰城を持たない、集落内に築かれた平地の居館であることがわかる。

さらに坂田郡全域に目を向けると、犬上郡との境界線上の山陵と美濃との境界線上の山陵に山城が集中していることに注目できる。これらの山城は在地領主の詰城ではなく、境目に築かれた純軍事的な城郭であった。これに対して長浜平野を中心とした平野部分にはほぼ大字単位で平地の城館が分布している。

これらは京極氏、浅井氏の土豪支配の弱さ、言い換えれば湖北地方の強い在地性を物語るものといえる。平野部分に多く点在する居館の実体が在り地への依存度の強さの現れといえよう。それぞれの在り地領主は在り地に館を構えることによって、在り地との結びつきを強めており、詰城の必要性はほとんど認められない。山頂部に占拠する山城はあくまでも軍事的緊張時における所産であったと考えられ、それが江北と江南、江北と美濃の国境である坂田郡の一つの特徴であったといえよう。⁸⁶

今回の発掘調査では池下城跡に関する遺構、遺物を検出することはできなかった。今回の調査はごく限られた面積の調査であり、小字「堂山」全域がすべて城跡ではないとは結論できない。今後は周辺地域、特に平野部をも含めた広範囲な地域における調査が必要となってくるのではないだろうか。ただ平野部に池下城跡が存在するのではないかという拙文の推論を立証する意味において、今回何も検出することのできなかった結果も重要な意義があったといえるのではないだろうか。

注1. 坂田郡教育会編『改訂近江国坂田郡志』第三卷P231. 1941刊

注2. 寒川辰清編 宇野健一改訂校註『新註近江輿地志略 全』P973 1976刊

注3. 滋賀県教育委員会『滋賀県中世城郭分布調査5(旧愛知・犬上郡の城)』所収P60 1987刊

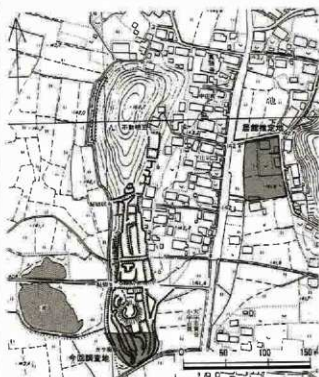
注4. 同書P46およびP191

注5. 山束町教育委員会技師桂田峰男氏の聞き取り調査による。

注6. 拙稿「太尾山城跡について一挽目の城一」(『近江の城』第32号 1989)



池下村大絵図(部分)
(山束町役場所有)



池下城跡概念図
(注4文献 P191)



調査前風景



作業風景



松の木古墳全景



草類除去後



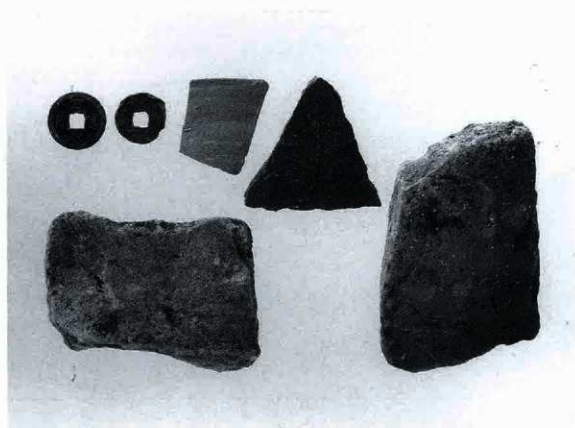
トレンチ内磔検出状況



作業風景



塚群検出状況



出土遺物



調査前風景



作業風景



T-1 トレンチ草類除去後



T-1 トレンチ表土除去後



T-2トレンチ



作業風景



T-3トレンチ



T-4トレンチ



T-5 トレンチ



T-5 トレンチ断面

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

松の木古墳遺跡

池下城跡遺跡

発行 1991年3月

山東町教育委員会

滋賀県坂田郡山東町長岡1206

T E L. (0749)55-2040

印刷 立木印刷

滋賀県坂田郡米原町酸井478-1

T E L. (0749)54-2662

